

Management Club Report

Mar.2012/Vol.111

Monthly Opinion 《シニアマーケットと歯科医療》

5年前の2007年2月と3月に東京と大阪で『団塊の世代活性化セミナー』と題する公開講座を開催しました。団塊の世代と称される昭和22年から24年生まれの世代の中で、1期生に当たる22年組が定年となる年を迎える2007年という年に合わせた企画でした。

あれから早や5年、団塊最年少の昭和24年組がまだ還暦前の58歳だったのが今年は63歳になります。しかし今の63歳は、盆栽いじりと孫との散歩を日課としていた、一昔前の63歳とは趣を異にします。少なくとも10歳から15歳ほど若い感じがおり、すこぶるアグレッシブです。

年金の問題とも絡んで、企業の定年延長が相次ぎ、かつては60歳でリタイアしていたサラリーマンが、相変わらず駅裏の居酒屋で怪気炎を上げ続けています。私の高校、大学の時の友人を見回しても、勿論、退職して悠々自適の生活を送っている者もおりますが、それでもしょぼくれているのは誰もいません。

そんな元気な世代を対象としてビジネスの活性化を考えるところが増えています。とりわけ健康関連業種にはその機会が大きく開けています。今月は、シニアマーケットと歯科医療について考えて参ります。

1

JR九州の躍進と挑戦

元気な団塊周辺世代

先頃、『インプラントトラブルFAQ』の刊行に編著として関わった原正幸先生からのメールに「私も62歳ですが、これからもトップギアに入れたまま突走ります！」といった同世代人を鼓舞するメッセージを見ることができたとき、とても力が湧いてきました。

先ごろは「パワーをもらった」とか「元気をもらった」というセリフが大流行りで、ちょっとした感動シーンへの評価がワンパターン化しているように感じ、「本当にそう思っているのか？」などと意地の悪い気持ちが持ち上がってくる、そう思っていると、3月11日、震災1周年の『天声人語』に「絆」が過剰に使われ意味が薄ぺっらになったという趣旨の一文を目にしました。

そうだ！思わず膝を叩いたものですが、私は原先生のこれまでの業績と現在の取り組みに乗せて、これからもトップギアで走り続けるぞという言葉こそ「パワーをもらう」と評価されるに相応しいもののように思えました。

「内閣府高齢社会対策に関する調査」より

内閣府が行っている『高齢社会対策に関する調査』によりますと、60歳以上の人へ